



花火は工場の庭で乾燥させます



10号玉の花火(直径30cm、重さ7~8kg)を抱える野村代表取締役

野村花火工業 株式会社

代表取締役 野村 陽一 氏

■企業概要

本社：茨城県水戸市新原1-3-37

工場：茨城県水戸市谷津町736

創業：明治8年(1875年)

資本金：1,000万円

従業員：25名

事業内容：打上花火・仕掛花火・火工品製造販売

野村花火工業株式会社は、創業141年もの歴史を誇る老舗で、全国花火競技大会(大曲)で5回、土浦全国花火競技大会で10回総合優勝し、計15回の内閣総理大臣賞を受賞した日本有数の打上げ花火製造企業です。

野村社長は、平成元年に四代目に就任し、先代とともに創業から伝わる技術を磨き、平成25年に「現代の名工」に選出、平成26年に「黄綬褒章」を受賞した日本を代表する花火師です。自らの技術を磨いて、観客をさらに魅了する花火を目指し日々活動しています。

(インタビュー日：平成27年11月17日)

(聞き手：筑波総研(株) 取締役社長 木下康之)

御社の141年の歴史をお聞かせください。

当社は、私の曾祖父である野村為重が明治8年(1875年)に興しました。初代が花火の製造・打上げを始めたきっかけは、なんでもやってやろうというバイタリティに富んだ気質と、水戸という土地柄にありました。

水戸藩は徳川御三家の一つであったため火薬を自由に扱うことができ、初代が明治になってから花火製造を始めることができたのも水戸だからこそです。余談ですが、日本で初めて花火を見たのは徳川家康とされており、家康お膝元の愛知県岡崎市にも多数の花火業者があります。

家康の時代には玩具花火しかなく、人々はねずみ花火等を楽しんでいました。三代將軍家光の時代に打上花火がつくられ始め、花火の人気はさらに高まり、火事を起こさないように市中での打ち上げは禁止され、隅田川沿いで打ち上げるようにとのお達しが幕府から何度も出されたほどでした。両国橋の花火は江戸の人たちの大きな楽しみで、花火を描いた錦絵も数多くあります。

江戸時代の花火の色は、現在では「和火」と呼ばれる木炭が燃える時に発するオレンジ色のみで、「洋火」と呼ばれるカラフルな花火は、明治時代に文明開化が起こり、さまざまな薬品が輸入されるようになってからつくられ始めました。明治22年の憲法発布の記念にあがった花火が初めての天然色の花火で、それを見た人々の驚きはいかばかりだったかと感慨深いものがあります。

初代は花火製造・打上げのかたわらブドウ園、眼医者、養蚕などを営み、剣術も天真流の免許皆伝を受けるほどの腕前で、その波乱万丈の生涯は小説のモデルにもなりました。実行力のあるアイデアマン精神は今も当社に引き継がれています。

二代目野村真一は感性豊かな風流人で、趣味に生きた人でした。

三代目(先代)野村泰久は根っからの職人気質で、熱心に花火を研究し、当社の基礎を確立しました。花火業界には剣術と同じように流派があり、親方に弟子入りして丁稚奉公をしながら花火の技



花火の星



星を燃やすと光り輝きます

術を教わることが通例です。のれん分けして自分の一派をつくる花火師もありますが、その場合も、親方には自分の技術を包み隠さず伝えなくてはなりません。流派全体では発展していきますが、独創的な花火をつくることは難しくなります。先代は自ら開発した独自の技術を磨くためにどこにも弟子入りしませんでした。当社には今でも弟子はいません。

私は当社の創業から数えて四代目です。小さい頃から花火大会に連れて行かれて空気になじんでいたこと、人に感動を与えられるやりがいのある仕事だと感じていたこと、ずっと続いてきた家業であることから、この会社を継ぐのは自分しかないという使命感がありました。花火の技術は先代に教わり、2人であらゆる実験を繰り返して研究し、技術を磨いてきました。

花火大会の主役がスターメインになっていると感じます。スターメインはどのようにつくられているのでしょうか。

スターメインの構想はシミュレーションソフトを使って組み立てます。花火を打ち上げてから開くまでの時間、消えるまでの時間、音楽に合わせるための打ち上げのタイミングもソフトで計算し、構想が固まったら、本番3日くらい前まで実際の打ち上げを行い試行錯誤を繰り返します。10回のうち1回うまくいけば良いくらい花火は失敗の連続なので、何度も打ち上げて本番を迎えます。

スターメインの人気は特に高く、涙が出るほど感動すると喜んでもらえます。音楽のジャンルや

新旧は問いません。どんな音楽にどんな花火を合わせるかは職人全員で協議し、私が扇の要となって職人全員の力が総合的に出せるようにはからい、わずか2分半の作品ではありますが、1本の映画をつくるような感覚でつくっています。花火が役者であり、音楽があって、脚本は作品のストーリー、演出や監督は職人の役割です。

平成20年の全国花火競技大会（大曲）で、コブクロの当時の新曲「蕾」に合わせた創造花火「蕾から花へ」で蕾から花が開くイメージを花火で具体的に表現して優勝したことは非常に印象に残っています。また、平成26年の土浦全国花火競技大会のスターメインは「幻想イルミネーション」というタイトルで、まさにイルミネーションを具現化したような、開いてから色が次々に変わる新しい花火を発表しました。

それに対して、平成27年の土浦全国花火競技大会のスターメインは「ノスタルジア～あの日の森へ～」と題して、アニメ映画「となりのトトロ」の挿入歌である「風の通り道」という曲に合わせ、緑、青、水色の花火ですっきりとしたさわやかな森の空気を表現して優勝しました。予め伝えてある作品のイメージと花火と音楽とがピッタリと合ったことで、抽象的な表現の作品が評価されたことが嬉しいです。

土浦全国花火競技大会では平成25～27年と3年連続で内閣総理大臣賞（総合優勝）を受賞されました。毎年重要な賞を取り続けることへのプレッシャーはありますか。

毎年のように何らかの賞と縁があり、過去15年くらい賞を取り続けながら業界のトップを走ってきたと自負しています。受賞することで当社の職人のモチベーションが上がり、成功体験の喜びを味わうことで技術が伸び、それが翌年の賞につながる好循環になって、当社のブランド力が強くなっていることは非常に嬉しいことである反面、下手なものはもうつくれないという大きなプレッシャーの中で作品を生み出すことに相当な苦勞を感じます。

日本を代表する花火師として全国的に有名です。花火業界各社の連携はあるのでしょうか。

私の技術を他の人が評価してくれることは非常に光榮ですし、花火業界の動きに注目して、熱心に愛好してくれる人の存在は励みになります。花火の人氣が高まるに連れて登場した「花火鑑賞士」という愛好家向けの資格や、花火を専門とする写真家の活動によって、花火の知名度や人氣はさらに増しているように感じます。

業界各社との連携については、花火業界のさらなる発展に向けて、情報交換などを行っています。お互い自社の技術を明かすようなことは絶対にしません。一方、自社よりも秀でた他社の技術は尊重し合い、共に業界の発展のために切磋琢磨しています。

今後ずっと花火をつくり続けるため、次の世代への技術の伝承についてどのようにお考えですか。

当社は、私の曾祖父から代々140年以上続いており、私の代で終わらせてしまうのは非常にもったいないことなので、何よりも重要なのは会社を存続させることであると考えています。

まだ確立したい技術の半分くらいしか完成していないので、これからも技術を磨きます。例えば、開くと何重にもなって見える「割もの」と呼ばれる花火で最も難しいものは五重に色が重なっている「五重^{いっしょしん}芯」ですが、五重の色の重なりを正確に、崩れないように表現するには極限の技術が必要です。全て手作業でつくりあげる花火で、何回つくっ

ても毎回同じように正確無比に再現できる技術を確立するために日々努力・活動しています。

職人を育てることをどのようにお考えですか。

花火師は、感性が豊かで手先が器用でなくてはなりません。火薬を扱うための資格を取り、技術を磨くために努力をし、花火師で食べていくという強い意志も必要です。

花火の技術を一通り習得するには5年ほどかかります。能力があれば、その後、自分で企画して花火をつくれるようになり、また、そうならわないと花火師として当たり前の作業ができません。加えて、シミュレーションソフトや打上げの制御装置などの機械の設置・調整などが自由自在にできることも必須要件です。

職人と様々な研究や実験を一緒に行い、技術について語り合っていると、時間がいくらあっても足りない思いです。



日本の花火は世界でも高く評価されています。活躍の場を世界に広げるお考えはありますか。

日本の花火は1つ1つこだわって良いものを求める精神でつくられていて、世界最高峰です。当社は、アメリカ、ロシア、フランス、エチオピアから花火の打上げを依頼されましたが、打上げる玉数が膨大なことと輸送が困難なことから受注は断念しています。海外の花火は、スポーツや音楽などのイベントの合間のアトラクションとして何万発も打上げられるので、当社の規模では必要数をつくることはできません。しかも、花火は飛行

機では輸送できないため、船や鉄道で輸送するしかなく、膨大な時間と費用がかかります。また、社内で大切にしている門外不出の技術が流出するおそれを考えると、海外進出に二の足を踏む状況です。

多くの国が日本の花火の素晴らしさを認識し、自国で上げたいと望んでくれているのは、毎年毎年良いものをつくり続けて評判が広がっていることの裏付けだと実感し、ありがたく感じています。

花火は日本の誇る素晴らしい資源です。平成27年3月につくば市で開催された「地方版クールジャパン推進会議」に出席し、地方の魅力を海外へ発信し、展開していくことについて議論しました。海外に出て行って現地で見ってもらうのは大変良いことですが、海外から観客をどんどん呼びこんで、日本の花火大会を見てもらえるよう宣伝することも重要だと考えています。

花火のアイデアはどこから得ているのでしょうか。

作品のアイデアはあらゆるところから得ることができます。ストーリーが求められ、タイトルもロマンチックで生き生きとしたものにしないといけないので、表現力を身につけ、それを常に磨いていなければなりません。

とは言え、アイデアは午前8時から午後5時の仕事の時間だけ考えていれば出てくるというわけではなく、常に求める心がなければ思い浮かばないもので、たまの遊びの中に良いアイデアがふわっと浮かぶこともあります。

人との交流、お酒、映画鑑賞などで気分転換をしていますが、遊びに行く暇はほとんどなく、「趣味は花火」と言ってもいいくらいです。

平成28年は色のきれいな花火をつくりたいと考えています。新しい花火を生み出すことは非常に大変なことです。今は「無」になって新しいアイデアを考えているところです。

御社はまさに現在順風満帆ですが、これまでにご苦労なされたことはありますか。

幸いにも、当社は存続の危機に陥るような事態は今まではありませんでした。平成23年は、3月に発生した東日本大震災の影響で、夏のイベントの自粛ムードから各地の花火大会も中止になり、売上は大幅に落ちましたが、その分経費も減少したので経営への影響はあまりありませんでした。

花火の効用や、魅力についてのお考えをお聞かせください。

花火を見ると、美しい光と大きな音によって脳が思考停止状態となり、悲しいことやいやなことを忘れられるという効果があります。これは、「心の浄化作用」とも「カタルシス」とも言われるもので、花火が徳川家康の時代から400年以上も人々を魅了し続けてきたのは、この効用も大きかったと考えています。

また、何10万人もの人々が一堂に会して同じ感動を味わうことで得られる連帯感も、人々が花火に熱狂する理由だと感じています。

これからも、この花火の効用を広めていくことは、花火師と花火業界が担うべき大きな使命であると考えています。花火は衣食住が足りていて、文化や経済が豊かな先進的な国でしかあげられません。裏を返せば、文化のバロメーターであるとも言えます。今後、より多くの国で花火があげられることを願っています。



数多くの受賞トロフィーの前で
野村社長（左）と聞き手・木下康之

長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。御社のますますのご発展をお祈り申し上げます。

■文責／筑波総研株式会社 主任研究員 國安 陽子